

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

80

79

78

77

76

75

74

73

72

71

70

69

68

67

66

65

64

63

62

61

60

59

58

57

中村俊定文庫
文庫 18
262
1



卷之三

卷之三

卷之三

玄之又言泉妙之門法之又法尔味
六以位彰名固賓之賓实山堂不荷
於此三者皆子侯之先君至矣
也云初子若被清雄也其原出於

中古文庫

貞翁ヨリ又傳於晉子楊惠之水齋
烏云至而著ハス俳文ハス多平篇裏朴鱗
吞鈔紙殊儻テ搖毫咄フ煥刻鬼ツ
氣不消乃矣可謂怪屋集咸被テ
序フ高也不敵リ亦ナリト始述其所見以
賸或自子儒雅士序アリ惟アリ有目

呼因哉言也ハシヤレイ詩不云乎善ハシ戲謔ハシモモコ
不為アリト嘗苦在三代ハシモモコ禮以ハシモモコ戲ハシモモコ九鼎ハシモモコ
之象以ハシモモコ威ハシモモコ儀ハシモモコ大禮器ハシモモコ相ハシモモコ珍ハシモモコ具ハシモモコ
天自天地之分觀ハシモモコ之於宇宙無ハシモモコ
物ハシモモコ事ハシモモコ非ハシモモコ戲ハシモモコ也ハシモモコ太白以謂ハシモモコ太陽ハシモモコ也ハシモモコ
莫土搏ハシモモコ為ハシモモコ恩ハシモモコ人ハシモモコ天無美以ハシモモコ地ハシモモコ

者一大劇場也生化者大劇主也
第約者生本淨日一也死生時失東
乐榮林者演刻也薦場歌閑雅
俗名有聲齋腐儒墨士以抒肉乳
口谈之而高自標舉以爲得龍法
自我觀之抑亦惟戲也亟嘗詔

之戲志戲耳文字祥游戲三昧於
楊文應也其竟觀

冤係事西里集滄玉舟機



序

物外卿譏和歌之三十一字珠

離之言。不足道。蓋東人而華其
役者。固一家云耳。而伯陽嘗送予
曰。山處洞傷根林木美則貞矣。
不如我猿乃失紅葉亦勝似人。

易感カラ。為愈ヒトト也。伯陽善養音。
徐枯アキラ。及深林。其昌不出アヒト。而下。
而上云也。如此可謂アヒト。志哉。夫
俳諧アヒガ。古國風アヒコノカタ。一釋。降而今
之俳諧。亦已尚矣。也與人耳。與アケ。与
詞長。乃能轉俗于雅。操雅于俗。目

中無不可象之景。心曲莫不可說
之情。上可以告アシテス。

玉皇天將。不可以諭。牙伶磨兒。亦
一往以諭也。頑俗陽。烹中人。
止論。已段令。多之見。不覺欣
允。允頤。而曰。勝讀窮。榜大詠。學詩。

矣。孰謂清之過汙庫三楊氏ナク
促京都寶晉子學清も煉均也。
去皮得骨太脊ほ羅奇如天吳
九首卷潮一喷玉幻ム紳士歌
黃魚纏黑巢不見モ銳銳ウコ
畏ム老衲揚人隻笠射倒塵中
若主豔而可怜ム雖故攜モ枝近
散眼泣衣交愁弓出大太吉原
主清才我日吾子清歌海内譽
准又旅脣清文不著歌林集り
于世惜乎人亡琴存寒心平寂寞
少矣三楊氏克終モ志ム無至

賴修文辭テ以自樂。英氣精彩。亦
得之餘也。若宋大尉袁州采文
章。是人之笑志。次而彭子名曰能詩
集。蓋之文章而能詩者也。余東人
假女子字。寫男猶志。徒允之。最
而采白集殿。之皆以源語枕艸。為
之。

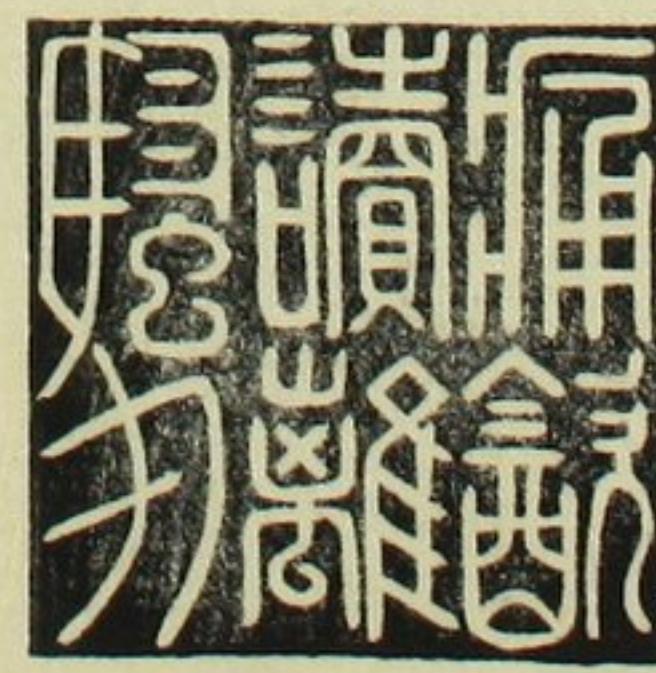
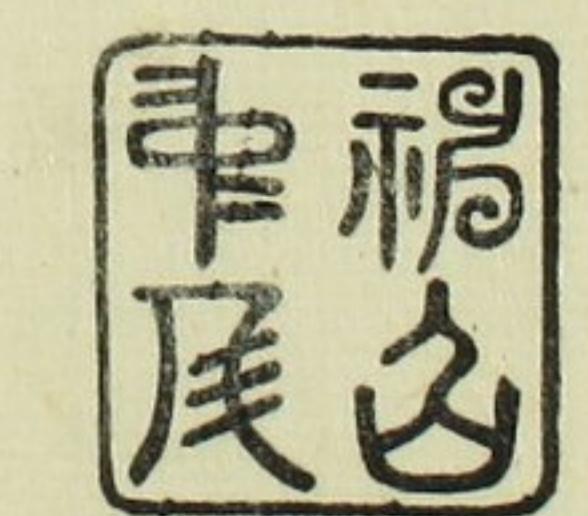
藍布而圓名之。未嘗少。仰詩寫
志也。吾与楊。則仰詩而文。章焉
者。非邪。予冠綏而佩史。父爺宣尼。
而娘迦文。迺文。迺詩。乃詩餘。乃
作詩。乃和歌。乃仰詩。性靈。攸。數
莫不染指。此亦二子。亦詩社。乃。金

榮久矣。今寫全^ヌ茲編、成^{アレ}是^ミ。

因筆、^ア云^ヲ授^ル之^ニ。

寛保辛酉秋九月

赤松山^ホ毛屋士^ジ記



書通上下略

考證文集を之つ並^シ、序跋ニつ追^フ。此正不可不備^ハ、
序^ハ不^可不^得也^ト。

一説^ハ諸^ニ文集とアリ^ハ極^ム不^可、和文集とアリ^ハ又^一
節^ニ之^リ哉[。]先^ニ重^シノ^リ終^シ實^シ記^シ文^ニ無^ク、
此^ニ實^シ全^体四^季叙^シ於^テ跋^シとアリ^ハ皆^ニ遺^シ
多^シ也[。]而^ハ不^可不^得也^ト。

一説^ハ諸^ニ文集を集^シる極^シの一書^ハアリ^ハ不^可、
安^シト^シ之^ニ遺^シ可^シ也[。]而^ハ不^可不^得也^ト。

一萬葉イチブナツより題小佛之字又李吟堵山の井四季の而
佛之字以是又從之字半身不以り終矣ト
一萬人得此而教之序ニ極焉焉子後後準的依ニ
と極く風流滅ムカシと之數十年と以テ十手と以
きハ先師アシシハ奈香而已か其玄空クニムラカミハ教
今日と云アハ佛説消長スムカシ今羅人財ニ移
玄を立ツト仰ア序跋を遺志を參る事於テキモセ
一世を極ムハサウエアハ門下ムダクノ祖宗シムシハ子
元ニ移アハ有アト

一源氏イチブナツ禁戒句小つうひと小字記シヨウキあしらフ一尚

佳境イイジを不擇ムカシくなくすけりまや玄ムカシを失ミタル
アリ

而道アリても多くを以正ムカシとち考多ムカシ而正ムカシが名ムカシ
志あれハ才子必上ムカシと云ふも承ムカシ一聖人之千ムカシ才
子諸ムカシ四シテ人ムカシトヘムカシ下ムカシされ以正ムカシふも上ムカシ有ムカシ
あり先ハウアハ監取柳下惠ムカシトムカシ肉ムカシ子ムカシ若ムカシ也
も性ムカシよりへムカシと云れ才子ムカシ下ムカシも多く見えムカシ下ムカシト
古六ムカシ桑取ムカシト

医事 上下略

是惟有てムカシ是惟

故もあらそと云事く家長是紀ムカシアラソ

跡競馬ムカシトムカシ尋不原ムカシト

答ト

詠歌文をまとめてある花を日々見ておふ
あり、おはなれをまとつておあり、お詠歌もあらわす
と幸こ達化山おおきくもおほほにをきともお詠の
およか下り小俗岬てきびーきともをもへ旅キとも
テんまち其志おひら詠詩とお事玉ふもりさくらのち
弓之過て弓弓ふ样弓弓あうれとお詠詩と年季と
奴僕もおなじ口癖のやうふ只めたゞく言をつねり
併詠歌文まとつておむさと併詠をつづり不えむ
彼處真を面白たるものうんとお人を詠の字うり人偏半
まくひあくべり俳の字をまくひ詠の字うり人偏半

かくとくとすりとハ祐志志の事やは余年の外記か
居えまちや又塔山の井のあまれの能乃字ハ李以義もさる
すああああああああああああああああああああああ
言偏草にて半終れてもひくはゆるハ中興の主事の
所をと費レトモ因痛クルを道と奥を行へりぬて跡
ナムノ名流臺を不見んにて源川の流を滿るく八雲山林
泉也偏キ詳アタリ不も有リ且又け更ミ序も不見
出レハ不言成教とて是也

か夕和みそむもててもうよ花の朝
ゆくまほなる匂ひやきの國ふと之

紙

ほくちへ

はゆえと若葉の葉の葉自らもぬりて今不持人

又

はちとみるきりかぬをもひへー今や詠詩
の句をかくもかへへる猿の句を一て詠うる
者句ハ林夕君也拂猿も中院内府公拂深字あすね
詠ふ老四家の川歌の狂歌なるへー太鼓ふしまの四君
お止へ其角波テ後御修興廢をキヨヨー文字縁
の月たゞぐ風風不共哉と爲ても寒號虫のく仔と詠

道の黑白そつすあハ一をふたす箇ふよまか一格
負多ハ馬あくと定多くひなさんま可笑十指十目也
云波ハ歎久か吐て一筋くの事不あ内も志も活潑略町の
不景是く海くふりぬく

師直てもなきをばとひす時作道ひ教多びり極よき
木と殊勝の傳手とむ立とあくらとあくらとすとより
うううくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
魔といひも一をも日蓮ハ師直とよ上よもも
臣氏を向かうて明くと前をうさぎ御く又にかくと

かくよのよひひ歩くこ下くのとふと不珍
んのあくまよのせうゆうやうよのあくえまふ
行雲のすけ馬糸なれよも「ほ氏ふむ般多めりを
名留もこれすれどくえまこはほ氏ふうでハ天皇えま
とさへ用とする所りかいつとくどりうねりと
とあくますくあくまのとくまハ御宿のえま可
いやふすへと能ともがくをびんうをそく半程もあくま
文豪もそへとさく。法財ハふにみたはつをなむ源鏡
を引て其場を補ひ作り焉へをたと葉つういを
文革にまわよ。一字を以れ色を引トもておもは

年正へと又朽老まくちぢり文豪没將古れと不弄
とて一派のひは小一冊とくま一アオ子もカヘー や及
左のなうてもモモモモモモモモモモモモモモ
丹波屋
傳三事老ノく是をもて不正痴老まふむづくを
門ふ志うあらとや南紀祇園先生赤府梁田先生、叙
をもくふ名邊スミカふきてまくしぬとて故唐鳥を愛一雪
未の舟休家の家とて仰ふ入がく。黑白あのたゞま
ととゆくやを上三鳥君と改称す首尾洞御船と云
事とぞ。其處高木山の事相承御傳の解り承之
解の初室累代茲徵ゆゑこを秘居すと方事

の居定め未写アラシモ先度ア魯山ミ絵小

石も石也意旨如何事事間不容髮喰
相用事武士ミ甲冑山伏ミ兜巾

ものさけて、本の上ふをついもする三千

世界九千八海

鳥子判

乞うて乞う山の極き海アリヤ

淡文集卷第一

同緒

饭のくゑ

梅飯を附す辨

寺事の緒

蝶西北坡小舟底泛ふ

雜話盜人ミ禪

玄波艸

楚八日經渡

東賀へおくゑ

一
二
三
四
五
六
七
八

九 惠南律師稀年加文

十 本日荀成初一人よ酬ふ

十一 望龍湖

十二 雜話六章

十三 獻鼻禪を宿辭

十四 陸陳旅宿へ宿る文

十五 紀陽う樹亭小松

十六 竿枕を送るて

十七 茄臥并枕賣

十八 審天乃おく承示教

五一 飯乃詩

眼小憂一耳とうふす。鼻うあう。喉^シ吻^ド在
う支。余小魚不酒^ス蓮ふ。やア御^スきすの衣
毎^ス詠慕^シ。初音榮舟抨^ウむて。すとひ好^フ
むと名つけ^シ品を画^ス。今古風流^ヲ培^{キカ}ム
瞬七亭ハ
大津角也是^シ身^スを^シま^ス境^ア舞^ス。寔^シ小瞬^ヒ亭^の世
促^ス未^シ飯^を先^ス一^て至^シて^好可^ス。され^シ百費^殊
百費ノ芋以
徒拾叶芋^ガ一^ら我^含畫^ス。一^もハ^独う^シア^ミ股^うち
あ^シか^シ志^をモ^リサ^ル。ね^シア^ハ物^を尚^シ
み^テ黒^ナり。げ^ル一^て至^テ精^く至^ル事^を無^シ

みもづひ。味もハ壁云ハ薰るあらんれどふりみ。ん
 あてなを殺のきふ。志ふニツ三ツ後うーてゆき
 く。た後哉と。むくお七神ちゆへ。おちくとみつ
 く。育一て辭ふ走り。自かさす。又始めてむき
 ちあの女
 ひきぬき
 うふほろ小鳴一。高安の女もぬめー。小飯じとーを
 まく。うふ元氣うちきよーきや。器持うーす凝ら
 きて。いひりり山の下。楊飯頬山の夜。空。風ふ
 居士六四休
 居士也
 るりー。四季おの野菜を煮て居ちう。孫ち
 うくああで。侍。ハ。ねち。休。ー。体。ー。体。せん。暖。也。と
 ちものを知。ぬ。人。も。ー。一。椀。さ。や。う。ふ。二。椀。お。許

のぼうきを拂ひ。三椀巻のさうをどめ。一勺たち
 まらぬ。ふすまん。ゑー。すき飯。うむと。龍
 を仰。ま。枕をさす。そ千。と。せ。枕。瞼。ヒ
 卉。夢。ふねん。人。ハ。歎。八十八。月。を。稀。あ
 す。お。往。今。とい。あーく。あと。の。夢。を。あー
 ホー。キス

堅田ハ良家
 生ルセ也

文りも。うすく。楓の香。深。と。

半日。折。ひ。乃。家。廬。ゆ。ー。て。た。り。ア。く。述。く
 並。折。枝。を。謝。ト。多。系。

大君。夙。雅。小。室。高。洁。く。月。も。田。每。朝。新。を。も。之。

雲花ハ
茶ノ名

清別業の元乃ちアハヌキナリ。ちれれヒタツ
の行うるよのまよはアリ。ゑくのゆうともを
く一にて迎一。遠きハ是無段のへうてあに林は
修詠乃ナシハ一とモ。け日いろ成日也。家作鹿
小葱みかよよニツ。すむ壺ナリ香草舍
み。宇治の橋娘ナリ。ちく袖を廢ひ。青苔月
引れよつう。子川ナリ。あはせよ。ひるは
ほくく。もよれ。にうけみひや。一ツハ
甲産屋き。をす押。ほりて。唐。先ねうくと

有えぬけちく。後ちの波を聴。夕風をさ
き。て。名古屋れさく。も今空。り。安。ト。す。ア
ウ。と。雨。の。晴。の。き。だ。ひ。ケ。る。ふ。そ。櫻。く。う。ア
と。号。て。便。賓。少。報。を。よ。き。れ。と。も。ね。う。今
一。ツ。ハ。ち。ア。き。く。う。れ。良。功。も。ア。ち。越。く。ア
小。風。れ。の。ふ。り。ア。お。こ。う。風。一。く。詫。乞。お。風。の。抱
セ。い。そ。ん。や。去。乃。ふ。葉。比。匂。ひ。ア。う。れ。ハ。麿。詩
理。と。ア。リ。ア。レ。ゆ。く。さ。ふ。あ。被。ハ。秋。の。す。玉。野。雪。
炉。火。小。紅。争。い。と。立。し。く。を。作。

魯華ハ
愛蓮子
角スル達

水の州。陸のむをもる中。せんハ花の蜜もすを
もて移ひて。唐北名を名ケふと。聞をもとひよ
ものふ升を割て橋成せし。魯華好人のむに
くら思ひん。枝あくに香風の遠きをハ清し。草葉
を泥より出る。小糸煙の朝日尔。たれき。夕陽尔
を。天子を自称くあはみとなりて亭、草亭乃

墨手一簾アモ。盃の數一盃索茶

あゆんさいの申所ハ首毛毛う

かう横川の
さくよまく上略
そめの歌
さくよすこまくおきのこも。横川社たくお月城や
と。此の間のさくよすむく。集もいとされ石き

葉のさく。初野を不待曉の役を終すも本むへあ)

吉四 城西の坡ア木を泣ふ

日成が桃花をいそりて涙をな。柳餘みゆ
て水波静ぢりき。流みゆと木とほれハ梅
傷つて風みかこ涙に染カキ小落まく。天落く落
!。病氣之子ふ従ひ行不を放ホイド。て。跡ふあ
ひ芦のひだ搜。仰くとねくゆ。被ゆれ
す。随えり筑る波よけ山みどる。石すもくもく
け。て。情けりよ。禹の作をれま。人への臂
度を相アタマを搖。度をうへてよくもと

後ヲ以テ

えふ。當功の名ハ山とうりも重くなす業ハ無と
ても軽い。ば山地頂ふ太極へと母を乞う。
チねれじもひあや出る帳を遣り。ちとり景所
郊のむれ白いを配て。孤峯要と號て。彼の解
をそひ。固よ一世を功なり。志うも今安ク在
や。おほやきのひやくみはうしにハモくあ葉
傳ふ平て下されぎねひ、とせう一古。後
度の國くねあと後うる船もふラク教ふ
あくの下志うく白く深墨く画て。布底裁
竹ふちきみあく。紙ワウも沿せれ川流を

吹く。日小學アリとく。古をうかぐて。をな前
もの。價の株をひく。川口乃いきはひ。
大に田手の名ハ乃手て百家今あるもの勢
ひ。三笠山下出一月うやくと子仰げ
とふるはれうみ源元祥はさはのひ
とうや。室ふりぬうきうねー小年。あやー
く船を左ふとりて。も風へとく。すなはれ情。
花穂のむく。めきて。あくくくくくよす
あん。葵峰みゆきと。鳥毛のまねふくか

一らぬほきみ。纏き緒をまとい。簞室シロ家カス
おとふひ簞室シロ家カス小船入。簞室を出て、舟を掠
め舟シロふ。まことに。神カミと。孤鶴カモハク乃
東ヒタチ西ヒタチも。——嗚呼何ノ人ヒト。嘻々
久留屋
比翼屋也 吾是舟シロも。ありゆゆは妻メテみろ。汝タマは
や。ちきりシロを。彼カミ又川カワかうりや。まあざりき
せあひつシロかシロす。し。渠カケレそくくら
忠チカラや。仰アツシん孝コウや。ハアモ。ちひ。放ハラフてれ。トト。や。や。
ほくく病イ日ヒ小益ヨリあき。或ハ成カム。がりふ
も。う。己タマふ愁シラフ。情シラフ。甫然ハラハラて恐シくシて。

墨を接シロす。手ハおろシふ。一唱シロの。あきシロと。あて

虎タケの御ミササギ。汝カミも。や。れ。乃シロ花

クシロ海シロ一千里シロ。湖シロかく。れの。う。石シロを。成カム

船シロ小。火シロの。き。小。櫓シロを。や。柳シロ。奥シロ。淮シロ。ふ。ん。と。を。や。
酒シロを。く。み。魚シロ。骨シロを。投シロう。ち。走シロ。走シロ。ひ。吹シロ
吹面不寒
楊柳風 う。か。あ。く。う。形シロ。と。楊シロ。柳シロ。を。よ。折シロ。三。子。ハ。弓。う。京
法シロの。新シロ。ハ。武。床。山。を。部シロ。う。残シロ。あ。方シロ。夜。よ。の。か。い。ハ
星シロの。花。達シロ。不。安。て。扁。舟。帰。城。の。光。ち。う。是

附甲辰三月三日

卷之五 雜話 盗人の禪

波阜多^{タマ}景氣^{カニシ}酒家多^{タマ}。或^{タマ}志誠^{シス}來^{タマ}て寶を
行^{ハシ}ふ花^{カニシ}を張^{ハシ}て酒花^{カニシ}は遠^{タマ}入^{タマ}るをね^{タマ}り
行^{ハシ}ふも取^{ハシ}れぬ^{タマ}。初^{タマ}ち極^{カニシ}くを埋^{ハシ}む
縫^{ハシ}あ^{タマ}を^{タマ}と^{タマ}方^{カニシ}へ^{タマ}の上^{タマ}ひど^{カニシ}く盜^{ハシ}人^{タマ}
小^{タマ}枚^{カニシ}を^{タマ}う^{タマ}か^{タマ}ぬ^{タマ}すの^{タマ}う^{タマ}き^{タマ}世^{カニシ}の^{タマ}よ
令^{ハシ}れ^{タマ}と^{タマ}ワ^{タマ}れ^{タマ}と^{タマ}是^{カニシ}に^{タマ}忙^{ハシ}辭^{ハシ}と^{タマ}外^{カニシ}て生^{タマ}
詣^{ハシ}なく^{タマ}柄^{カニシ}枚^{カニシ}を枕^{ハシ}熱^{ハシ}暖^{ハシ}ト^{タマ}タマ^{カニシ}弓^{カニシ}
日^{カニシ}小^{タマ}弱^{カニシ}き^{タマ}、^{タマ}裂^{ハシ}て^{タマ}花^{カニシ}匂^{カニシ}四^{カニシ}を現^{ハシ}き^{タマ}え^{タマ}被^{ハシ}父^{カニシ}老^{カニシ}
不^{タマ}健^{カニシ}身^{カニシ}あ^{タマ}男^{カニシ}二^{タマ}十^{カニシ}余^{タマ}人^{カニシ}船^{カニシ}め^{タマ}を^{タマ}ア^{タマ}ヒ

酒桶司也

居^{ハシ}あ^{タマ}う^{タマ}て^{タマ}盗^{ハシ}人^{タマ}歩^{ハシ}んと^{タマ}す^{タマ}き^{タマ}と^{タマ}道^{カニシ}す^{タマ}め^{タマ}称^{ハシ}
ぞ^{タマ}ほ^{タマ}み^{タマ}不^{タマ}桶^{カニシ}司^{カニシ}とも^{花^{カニシ}も}本^{カニシ}と^{タマ}一^{タマ}金^{カニシ}と^{タマ}一^{タマ}晩^{カニシ}
取^{ハシ}一^{タマ}い^{タマ}や^{タマ}い^{タマ}ふ^{タマ}と^{タマ}ユ^{タマ}支^{カニシ}を^{タマ}車^{カニシ}御^{カニシ}心^{カニシ}を^{タマ}足^{カニシ}め
蓑^{カニシ}縄^{カニシ}を^{タマ}ぶ^{タマ}た^{タマ}ち^{タマ}毫^{カニシ}せ^{タマ}て^{タマ}手^{カニシ}こ^{タマ}の丸^{カニシ}を^{タマ}搜^{ハシ}つ^{タマ}
一^{タマ}腰^{カニシ}ふ^{タマ}さ^{タマ}一^{タマ}尾^{カニシ}を^{タマ}あ^{タマ}弱^{カニシ}い^{タマ}う^{タマ}けて^{タマ}花^{カニシ}の戸^{カニシ}
を^{タマ}ぐ^{タマ}ぐ^{タマ}ぐ^{タマ}ぐ^{タマ}ぐ^{タマ}ぐ^{タマ}遠^{カニシ}意^{カニシ}を^{タマ}わ^{タマ}れ^{タマ}ぬ^{タマ}倉^{カニシ}
倉^{カニシ}あ^{タマ}び^{タマ}居^{ハシ}大^{カニシ}背^{カニシ}の^{カニシ}あ^{タマ}を^{タマ}つ^{タマ}き^{タマ}同^{カニシ}も^{タマ}う^{タマ}す^{タマ}一^{タマ}
文^{カニシ}字^{カニシ}う^{タマ}大^{カニシ}き^{タマ}を^{タマ}ゆ^{タマ}て^{タマ}よ^{タマ}く^{タマ}く^{タマ}忘^{カニシ}い^{タマ}く^{タマ}く^{タマ}と^{タマ}事^{カニシ}
を^{タマ}あ^{タマ}く^{タマ}う^{タマ}ふ^{タマ}け^{タマ}て^{タマ}振^{ハシ}つ^{タマ}て^{タマ}ち^{タマ}男^{カニシ}と^{タマ}お^{タマ}を^{タマ}す^{タマ}
これ^{カニシ}ハ^{タマ}何^{カニシ}じ^{タマ}よ^{タマ}を^{タマ}ん^{タマ}ち^{タマ}足^{カニシ}は^{タマ}と^{タマ}も^{タマ}と^{タマ}も^{タマ}だ^{タマ}

盜人がも固うけすらくびましるいくくと
亡な計け辭べ不よをすすくゆ戸戸を振ふりいで詫たを
ももくくてて能めむくる時ときそそ公くわ信のん云いのあをあ
八角磨盤もも禪ぜん核かくも鉢はつ急きつ磨ま盤ばんハ空くう轍じれを走はりは振ふる
禪語也

世せ盜とう人にん乃の丈じ丈じ多た必ひををももん

亡國タルハ 中山ノ君ハ一杯の羊羹ようかんを公園こうえんを亡なと家四ハ食
司馬子期也 战國策

不ふ吟ぎん入いりて盜とう人にんを亡なと牛うしああとそそに詫た應おう

執つか念ねん窮きゆう不ふ可こ佐さ候ひありと首くび呑のみ落おちく賛さん之の

第6 真岐艸

再斯可か也 再斯可か也とハ日ひくく人のうう人の宝成ほうせいへへ。一句いを徐ゆき

子云語

訟うそ
赤見内自訟者也

の價ひ四よ千せんつつう訟うその風色ふうせきねん。え文季ぶんの秋あき
一いかれは玉たまよよーと詣まい候ひ。中臂ちへい嗅く洞どうああい杜府とふ
ああはは袖そで。聞き仰あく今いまく詠よニととすすて例たとひ
有あはは布ぬのを詠よ候ひ。名めい葉はををへへととひとひ
古いをを今いまー新しん意いをを信しんたた。ささりりとと云いをを仰あふふ、
腹はら葉はをを解わかんく其その句くハ

故ゆゑハ施はく波なみを極きわど葉は乃の自じ

むはは世せの波なみ乃のはは詔ほりりて元もとふ紙紙もありりや。またに
せせつつすすとと思おもははままに
みみつつききかかううくくー九く日じの夕ゆふははううおのの敵のぞの苦くるもも。神かみ
ううききせせううきき、
ううききううききううきき。

よ先て多く句をさうやと尋ねよ。云
ふ可也。ば日の匂やと菊の月ともよろんも稀平を
あへせせ。下立文すむと家よりくよ。れぞく十三
月の月よりひよせ。葉めまを以匂ひ世よふるもん。
後の方は菊や月とを詠ひそく一句。往昔も見
つ。蕉翁よあへん。かくよくこそおさハ。富士の烟の
入文さき。行樂にかきくあへとアヒ被ハ。若く無に入ぬ
仍故下立文。をよきく。行樂にいき作配ある。れぞじまく。杜甫
子の余情。あきらめ。來く凡遠よ眠く。にぞくふ向をめく。被あら。はなた
日給。酒有る。栗林自古哉。と。東大寺か熟びて

簡有真味
欲弁已忘
言陶淵明

立文まよく。苦しくて一折痛い。ほどみ便ニ折
み下され。もううやう何にて三思よどくせ。今附
連紙の後。六十一首。ちう先て用あう。世人。立連紙
列とは只句の上手にて軽を備を多。真味風流く
ハく欲辨已忘言。許を行ひ古後もぞうて。
立文まよく。立文の連人有て。十三折子を
むすびて一句。清歌さへ天下が舌を感んと
静よおもよ。りく公室の連人有て。十三折子を
むすびて一句。清歌さへ天下が舌を感んと

九夜十日
九夜日よ
十日新治
篠波連次

らき。おもかにてむねくさうなり。幸よナ西夜到
照りうる情光三秋れ侍をはよりて。國うるか。ひのとく
年ああれのとく。謝云自有。おまり。香きくねぢりて笑空如花人と因み
東山妓金屏笑坐如花人李白。一まのなみとくきに遊ひ事李。あらじども乃
あらじもと。あらじまい道も。上達アとくニゆ被と。ワラやうふこと
はくのとく。あらじまへ。先とくもくふへうや。先君はうと
えすくとく。あらじまへ。先とくもくふ同もす。まめりにとむ不事と
はくのとく。あらじまへ。先とくもくふへうや。先君はうと
えすくとく。あらじまへ。先とくもくふ同もす。まめりにとむ不事と
はくのとく。民のゆか友うき。すま、ことくれをとくう耶。
まくとく。あらじまへ。いとうくんちも侘せや。すみよーの不痴と想ひま
く。好くとく。あらじまへ。いとうくんちも侘せや。すみよーの不痴と想ひま
く。ふ一句難解。サと

古人ニ故きの一來で秋乃日

小井の上也
たる新くは
時嘉母六十
豆井丸吉
小井ハ伊賀
小井里居の
小井里居の
娘中宮の
娘中宮の
時放蕩のれ
例のねハーくひくー至第ふ。頗リの日皇都山猿狂歌
う。むれと昌迪十三古乃句人とく聞申

後かと菊下ちや一宿までの月

達ふ御くろき。宇クシ。奇妙。志くく胸さくうひ聲
くよわろくと袖をもと。十四表の唐装を今文にと
みあくまうけへま。の時絶唱佳作をすくす。北野の神の
行年の秋を。佛教もおもしろま。河す秋を。おうれりんぞ
れくとく。

樟原のたも
ひぐってま
みえらん
令葉集
八情の光清
とれどい侍る。其の又のまつたより八月十五夜石山
歩詠て至
すねり
スルカム
チはげ
おもろく
おもろき
秋と云うる
本の方もの
次アノうちの
引言
死ぬての日本の方に自詠ふあし
とち向と死のそよご称嘆よこゝ
神をもとを
あむらむくもくもくもくの歌をかへ
心はうづの秋ハキモキ

此の奇曲て一句ともひあんう。原氏の間にてや
茶幸也へいづーとすまきを。ふ山極辰も詠れ
あはうそお書かず。匂斗ちてあそく神をほそ

きえき。おとこに奇兵の人の歌う。次广の巻子
をこゝに書き。此の奇曲をよめさせまと
式(一名五子) 平
云効徳ち家
女年傳子
か
和歌も流さうもけよめくもくもくを。昔今の人のも
自らうへたまもかくねうへ。死歌と

林うちハものとて死歌をかく。此の奇曲の奇
は奇兵也。さて、是の歌はと上へて佛のみがたと云ふと
うるハものと昌運とあり、是をと云ふと云ふと云ふ
ひびきら。歌名は金波。三五初は夜詠。玉もふ如歌うもく八月乃
と寧の歌の夜詠アリ。仍出
碧波金波
三五初八月十五
夜詠亭子
院作
菅淳茂
贈歌流ノ句ハ
起句玉不缺
絶句セ言律中略也

文部省圖書監修官
集一
序引曲流八家傳
要とぞきあらども五字當時訛語日く有へ
他ハ不知ヤ
時文文有り
其のトキ
九月仲旬

時え文も一先のとく 九月仲旬

弟七 楚八集四日經跋

古今の名序叙をアラビヤ文字で記す。中句、其も孤家
貴族ハ就て
上古ノ風雅ノ様被るや有乞食ノ客、以ひる語
紹巴ハナト斗ミ縛上サ被ル称名院殿紹巴ハ乞食のあり紹巴トテ
戴恩記出
レ申シタムアリモアリトモ申シタムアリトモ
乞食ノ字
古今の名序記して紀ノ志乞食

卷八 東方朔入房賦

系
東
加
一
五

月を整
日文選

日高丈立清 ゆく峰へ。日高す。事丈立たれと。ある。睡る。朝
各處全然 濃也。至る處門をよこす。多喫。あ脇。ゆきと。清風
をもつて去

十六 惠南律師稀年之贊
久はちく行めはえよをむりつる

文集一

伊勢う古事とたりひよれう。傍よ親を言乃
無もせ下ふ。ちきりの日暮れ枝竹を遙りかる
絶く一月。玉は雪のまほさうれおはやく。底尔
うつてそみてたちるを。御一姫れ志とす。詠ふ
短あやみをうそくう引半角へや。毛とのを
を欲く不思名利より。終々意体叶の素すま。
はとハ九の毛枕ニツキも。そくても足ら毛まじ
とみちの羽タヅや。すての匂ひをそりむねひて。
たのはうの高仕。頗りねる。人懃人あそびん
侍人ちく。人あそびふく。何不は希ても

五文字
書云く
古語

矩を諭す城戸や法の花衣

ヤアモリ一兩人。戯をすまゆゆつまく五つて。

四事の老人ます庵あわ成呈ス

キ十日箇成局ひー人乃もとへ

毫陽忍
字ハ北山法皇
ヨリ自ト取
老ヲ女三へ
瑞くせき
をえん

うにアソウ人の林あくろさうかとて。廿六本六
七本掌持手の右左原ひ。時をハ流れあく
志あう。うに地出せ。扱うた古木をもとへく
流く被く。やうに蔓床題をもとへく。元
不驚きの斗。志くも雷のひき渡り

龍筍ノ
一名松牙
トモ云

龍筍ノ
一名松牙

おも。おみ。あさくさかくも。いふ。一。近行くの牙
おおへ縄。縄乃縄。矢は。うね。或ハ時。人の蓑。を。倒す
トモ云。龍。筒。一。また。き。お。一。さ。風。轟。ひ。積。矢。キ。お。勢。ひ。ハ。れ。
う。ふ。り。う。く。繁。兵。奪。ま。乃。い。ら。ゆ。う。外。て。ハ。御。う。
主。毛。は。角。く。が。ね。一。や。く。れ。る。お。み。か。ほ。
ヨ。リ。走。り。あ。り。て。お。や。つ。うち。く。ば。ざ。れ。お。や。セ
り。と。ほ。さ。く。く。と。引。放。て。ハ。ま。く。あ。や。一。け。よ。え
行。え。ゆ。れ。里。い。う。成。娘。を。生。出。ん。と。風。ふ。そ。サ。下。よ。く。ん
れ。と。ん。ひ。う。き。い。さ。子。と。の。ふ。あ。く。ん。と。よ。そ。
そ。と。切。新。く。あ。く。ち。ふ。約。瓶。と。名。つ。け。お。り。葉。

まへしけれむ。さればのほりまとも今も
はうむしゆ。あさりく剣はむかみてぬき
一あん。沖中川乃のぬきね紙津よ。まつる
馬歎笛^ヲ
融をくて七孔をあくへとくせりめ。ゆき葉
八音ふねくもく。岸の枯葉やをあへまくをつま。
精列おねづけ。まじめ日詠く。秋水、又門やとくん。
考妣^ハ
父母也^ハ ほくくくくくくくくくくくくくくくくくく
よふも。信よをひゆ中ア教ゆ。そくや。いづて無君
のあいそんをとけんて。寄ちゆふも中く

考妣八
父母也

父妣
母也

竹胎
竹皮

れりき。竹胎の川流我そんやと隊士乃被子
兩人泣く孤城飛矢て謝ス

オ十一 隅邊湖

碧已有り膝平揚て彈ふ人なし。柱と鍾取
うて波よ木也波りし。柱の名を瀬田代橋と云
四絃一筋
九十月
四季子ヲ四絃
ノ擬^{タリ}動た草聲て。冰扇成化る日華三冬盡す秋よ漢
を歌た。雪も冰も嘗るれ事^シ。詠卷みさに^シ。梅う
任侠
男伊達^ノ枝^シらん^シ。任侠は吾ひ併^シ。たのうち。北不^シ南ふ

肘を洗^シ。手乃庵^シ。朝陽^シ。快^シ。梵字^シ。臍^シ。
うぬき。心^シ。守^シ。妙^シ。抱^シ。云^シ。家^シ。上^シ。身^シ。枕^シ。桃李不言
ダマリモ^ノ だまりの成^シ。譽^シ。重^シ。の圓^シ。高^シ。人^シ。張^シ。投^シ。かく^シ。不^シ
貞女^シ。妓^シ。ふあ^シ。采女^シ。あ^シ。され^シ。盃^シ。と^シ。
眉^シ。展^シ。鳳^シ。凰^シ。愛^シ。すへ^シ。櫻^シ。ゆく^シ。あう^シ。え^シ。わ^シ。
緒^シ。もと^シ。
念^シ。ほ^シ。
子^シ。先^シ。樹^シ。
九月^シ。十^シ。
長^シ。能^シ。
もう^シ。え^シ。
平^シ。重^シ。車^シ。夕^シ。衣^シ。や^シ。の^シ。う^シ。あ^シ。あ^シ。め^シ。の^シ。様^シ
をう^シ。あれ^シ。輪^シ。乃^シ。や^シ。波^シ。秋^シ。平^シ。皆^シ。桃^シ。葉^シ。葉^シ。

楓葉荻花

三兩声曲

翟巴行

樂天

はく葉熟さん。三兩事の曲をかう、うら風ひやく玄
げん。重に雨うて不すま月日枝の空よ印一にて曉たるや
を。西時則絃とう機絃絃あらへ。然翟巴の大サ美山乃
かみよ余れ。もとこー私ちのくう漕うむ六十里程

百年三万

六千日

李白

了。曉行舟よ旅泊りらん。久百人三百六年度。報
れ此翟巴を揃く洋ん。首強く、もと人あり。城あち
紫式アとおはう娘。左馬使宣孝う書。上東門院女房。筆がつづ
文法曲流

て機さー。湘よ紙抱てもううううう

いつまのーいづきれ時時みう女御更衣のあくまくひなれすふ
相重、発揚

と鹿飛毛くでさく一ナニ仰くをふなておほく

おもむれ
竹川を
歌人語
名山齋ちん
て。石上老有水淺く江不満。花も山鷗もみらう。縁ト
納メて雫の袋小底。雨の糸もとよくめぐらりそ日月
是底難ひ。不二山のうへうへ

才十二 雜詒 六章

一昔去坐人。く行家ふば。白玉山山破日中下も
小車も或大家より御前變ひむ。おうに歌ひ詠ふ
と。破月くぬ山ハ御家慶して後も歌あうてわく
きも。又ハ歌足斗。歌絶ちあう。微おお慶左文右武
の字えちく常平和すれ道底好む詠ひあうへ
朝とて初の
沙翁ミリケ
天子あす
張を嘆き

ヘ

至るに通算の

珠城をひ

斗の能書よ

らをたまふ。或

竹のうじて

あまあつて

さきは

あと

御名まも虫

又あ

とやかく

経よろを

のむのゆ

れふらひよ

蒸灰我を

掌くわく

これほうう

ふともうそ

らひたまふ

のふ乃春

お教きくめ給ひをみよ。おは終神子にせひ出
うへと内府云とさちふ賣たまもおあいく
と御言も年まくさり。時より時よりかくはれ
平やあく乞ひのくを終ふ神れのせり。後ろ日承
けんう。おもむきよはよさふ奏聞ゆく
と御アヤクあつて名みつゝもめほれ新て
お一々おとづて奇の教く御あるえや
たまんう。天機あれくくはよふあおわの
りぬきてお有りゆきある玉毛の匂いとたゞそ
の水らきよは常の外よそくみハ教まくかんや

と院宣ひをされ、因縁云ふも亂し奉りに眉
まくおはす於くしてわがの身をひくあんぞん
かく身もろき愁くてもううひたまくもゆくな
く御次方々まほの紺うい又まほ姿をわざても
うらうあく。總ハ宣ひをもととげ事
ヨリハ一ノはくはくみかづくて内府云う野君
へあうのやく作入るまさればちくらみますあ
くあうかく有るたるとそく仕事年数
積も日減扱に日ふ弃すてて諭意一仕事の主
下なまく。奇道のちき事今経あゆま

歌よし翁とあまくらふちうてあらうこそと
疑ひに詳すいひや庵齊仰慕もなうとア翁ひ
一とやんのひかるせりそま人の生なほ和
なりへ。とおれあくをのゆもかく。まくへた
聖古名ノ人旦那の外。せあるまつた所やとた
えいすけくよ歌はとさうハ余りたりくらう
とて參我抜きると矣。後有く

一部ニ帝子坊とよみ空殿のまく成ワラセ
附四角よんすみ割て。四面に割肩もくふ坊と
よも配當さうる奉章あり。或き割まのゆは小

竹本元れと作きしれも一大事の仰用す
と仰次多至四角不割く四面のくろ肩微塵も敷
らとくに割くもの例よまきく清巣へせられ
拂拂姫を抜いて、はくくかれとくさのむさか仕方
みを仕へはくも坊とよう割く指あくふか
くの薺芥粉とくふきをあく。難むきあこの
あく割肩伏配事へてうそくはくとあく例の
君とされはもとと作あて聖思惟へたあし。如
の人にかうてかくへと遠くをよど尋ねひしれ

え。伽医者アタシがハジキをハ肩庇包^{アシキ}と次くの
御用^{アタシ}へんとみ設^{アシキ}かあん御到^{アシキ}まも律^{アシキ}
支^{アシキ}法^{アシキ}と脣^{アシキ}をえむ仕事^{アシキ}か次御用^{アシキ}のひま^{アシキ}と到^{アシキ}
さ^{アシキ}とアシキ。笑^{アシキ}と身^{アシキ}たす。影^{アシキ}奈^{アシキ}死^{アシキ}とて坊^{アシキ}と
ハ肩^{アシキ}庇^{アシキ}じうとあ^{アシキ}ん右^{アシキ}人^{アシキ}も竊^{アシキ}看^{アシキ}とま^{アシキ}屋^{アシキ}
責^{アシキ}ふ不^{アシキ}及^{アシキ}あ^{アシキ}、あ^{アシキ}と御^{アシキ}様^{アシキ}姓^{アシキ}お^{アシキ}にち
エ^{アシキ}一^{アシキ}か^{アシキ}ると身^{アシキ}。御^{アシキ}の道^{アシキ}う^{アシキ}と以^{アシキ}功^{アシキ}をあん
とお^{アシキ}し侍^{アシキ}

一^{アシキ}所^{アシキ}不^{アシキ}及^{アシキ}身^{アシキ}御^{アシキ}動^{アシキ}う^{アシキ}有^{アシキ}経^{アシキ}裁^{アシキ}一^{アシキ}位^{アシキ}御^{アシキ}

用^{アシキ}不^{アシキ}及^{アシキ}身^{アシキ}御^{アシキ}御^{アシキ}身^{アシキ}场^{アシキ}京^{アシキ}師^{アシキ}不^{アシキ}

らあ^{アシキ}云^{アシキ}世^{アシキ}の御^{アシキ}撫^{アシキ}ちう^{アシキ}ま^{アシキ}去^{アシキ}坐^{アシキ}人^{アシキ}情^{アシキ}の^{アシキ}
傳^{アシキ}きにま^{アシキ}せんと^{アシキ}す^{アシキ}お^{アシキ}。所^{アシキ}人^{アシキ}不^{アシキ}て^{アシキ}も^{アシキ}我^{アシキ}
ち情^{アシキ}者^{アシキ}と^{アシキ}世人^{アシキ}方^{アシキ}を^{アシキ}一^{アシキ}家^{アシキ}も^{アシキ}活^{アシキ}く^{アシキ}相^{アシキ}住^{アシキ}者^{アシキ}と^{アシキ}
就^{アシキ}夕^{アシキ}夸^{アシキ}アタリ。又^{アシキ}は大^{アシキ}御^{アシキ}立^{アシキ}園^{アシキ}の時^{アシキ}ハ世^{アシキ}の^{アシキ}事^{アシキ}不^{アシキ}
け^{アシキ}事^{アシキ}も^{アシキ}ナ^{アシキ}ナ^{アシキ}。有^{アシキ}時^{アシキ}御^{アシキ}自^{アシキ}情^{アシキ}の^{アシキ}は^{アシキ}の^{アシキ}好^{アシキ}
石^{アシキ}作^{アシキ}作^{アシキ}室^{アシキ}の^{アシキ}や^{アシキ}。花^{アシキ}も^{アシキ}匂^{アシキ}も^{アシキ}有^{アシキ}経^{アシキ}中^{アシキ}
れ^{アシキ}の山^{アシキ}並^{アシキ}川^{アシキ}の傍^{アシキ}へ^{アシキ}と^{アシキ}え^{アシキ}なる草^{アシキ}れ^{アシキ}行^{アシキ}う。御^{アシキ}様^{アシキ}
御^{アシキ}ふ^{アシキ}くれ^{アシキ}。幼^{アシキ}を^{アシキ}や^{アシキ}と^{アシキ}そ^{アシキ}の^{アシキ}方^{アシキ}今^{アシキ}左^{アシキ}
名^{アシキ}人^{アシキ}と^{アシキ}せ^{アシキ}と^{アシキ}參^{アシキ}ら^{アシキ}人^{アシキ}く^{アシキ}お^{アシキ}よ^{アシキ}に感^{アシキ}んの^{アシキ}た^{アシキ}性^{アシキ}
御^{アシキ}并^{アシキ}れ^{アシキ}言^{アシキ}外^{アシキ}字^{アシキ}讀^{アシキ}う^{アシキ}如^{アシキ}よ^{アシキ}と^{アシキ}御^{アシキ}玄^{アシキ}有^{アシキ}

とおもひて。かちに退く。佛家にふじう。今
の佛定生くせり。あくまく竊小神。家をまく。寺を
やめふく。まく。まくは是よりも。私事も常く。御
家より。ハ色乃疎。よなまく。にとて。又花の廢様化
は。家とは。格が平。古。舊情。まく。て。始度。と。濟用。と。神以
利益。ふかり。不ア。ほ。佛道。奥。まく。作極。よと。まく
小羅。成。まく。也。と。佛。一陣。へ。ヤ。の。時。佛。云。佛。教。文。高。雅。
奥。へ。と。せたまく。佛。家。だ。と。ゆめ。せ。そ。ま。方。勘。考
う。ヤ。まく。一言。まく。まく。御。極。ま。象。昨。今。よ。か。入。院。と。む。入
一。便。も。入。院。う。れ。と。寝。と。ヤ。寝。ま。ー。と。御。玄。セ

佛家。だ。むね。う。だ。ま。う。作。下。さ。れ。趣。ま。長。い。う。比
ヨ。シ。ヤ。ト。ミ。ク。レ。ハ。モ。方。知。る。は。ま。う。ま。き。一。字
也。寧。盜。也。成。おく。廻。ち。や。破。若。ハ。い。の。斗。の。價。み。て。下。付
多。を。役。人。考。る。下。ど。り。ま。の。う。お。尉。の。價。平。仰。不。一。倍。半
支。一。章。金。成。ひ。ど。も。必。一。信。劫。大。よ。を。一。作。多。个
さ。取。く。て。を。打。角。工。ま。平。ひ。く。も。抱。好。持。く。道。異。よ。あ
ら。す。隼。う。ハ。大。名。く。成。ま。り。て。益。を。食。里。て。ア。渡。世。と
も。以。ま。へ。と。ま。の。う。へ。め。も。た。れ。を。用。る。方。か。も。主。く。度。を
れ。魚。ー。佛。家。の。度。は。細。工。少。し。神。の。利。益。う。は。か。う
ゆ。と。誓。成。ま。く。い。ひ。作。る。み。益。あ。き。よ。佛。う。ハ。方。半

仰そ渠ふうせんの里城あり。例小豆本寺かな
くえれふむもてはうよゐる。せ度乃研第ふ
て二年をうりと他の事歎くて渡せ絶トナムアテ
了セス波五ノねぬも奥カヘ。たゞさみくわんよ
うしん利欲外と云道異も左タリふたゞに折
め一言をよ仍てお入体とあよとアケルとせ行
き。勘定すこく京へゆくふをほやう魂が刺サたり
のおきひあきとくとまわらかく。波殊サシてまづり紹て。ば
時を取んがまほとおきひます。まうハ仰のやくふ
す。以下早ハヤシやふていひうちたまひから。とう

生の爲同布せまつたるもハ有りむ即君は貴人
の貴なりとて御事取るゝかく斗れ未面とれども未
雨ともすと懲りて我をとめとたゞよそ額小
汗毛あざれか。何う御入事ても内外不立と即
彼へ來り。三度もえうと經て御事御教先拂ひてから
とく御うちはお入やうと我除ぬハ源氏かく即君
へ御もひやうるとお語あらう。源氏かくとお語有
中より室て女不貞御殊吸いをアリ候りうらと叫
ちと呼びゆきのうと暫くためひ志のどもまよと
かくやみう。同一くも跡源氏かくあるゆふ室め

不承取などは語もあれうさゆくを自ひかへ
ものううへ事平ひうけきむたものせ。えつうす
あらうておとひうけあきさいものゆくわらうす
ととおほうくーなどとくとまくふきくーした不
トれへきなありやうてこゝひ終ふ候とんのい
もしやうよんえほ候くうとくと中ぬふくむ太
もくあくふ室

始ほえ世人の忍りハヤめ安ゆくへ況や風歌の
君也タキモト松

一白居易ハ子をさだとて枕み残る葉残くむと

説すう白氏文集ん紙はきてん侍うう不承取
すもねーいのありうれす小有事やーいね
一今生神てれ成ゆももハゑぬ并謡乃作志とひ
すハ嬰兒も常平口すきむ事ありば御上通りは
中興の祖と云大聖徒經うくとハ加々氣極と云ーと
の指物とは抜テ及ひ義方支後疏後と云者也其末
流すの卒章の工まじ骨殖離きくあらすかと流
糸を失はざるゆの掲焉あらうや

一芭蕉翁能中お底つまへー是ハ芭翁乃すもと
て翁をうりてすきが失ひ芭叟の正道然者てたと

幸利を得ず。すはま一通。方力有る連中も芭蕉風
とかやのものとおもひ。涙ナツヅすらく。そぞ非なき。既
せ芭翁今來らて。みつう一度を失ひ。名死マシ。

オ吉 捻鼻禪トクビを語る譯

撓鼻禪

良運記エイダーリ

比叡山の見れなく。里長ミヤノミツリ。れい。老
師乃シラニ。七月七日。縞シマ六尺。か草。將シヨウ。と
毛モハ。星ヒトキ。一。撓鼻禪トクビを

日枝ヒマツ。お詫ハガク。海シマ。とく。

と深く。撓乃細布トクノシブ。と。元。感。す。思
ひ。念。を。か。一日。の。手。ハ。中。す。修。湯。と。く。り。つ。ち

国民の事ナシ。ほふ。よく。トハ。白キ。とも。かく。ハ
世。以。も。と。と。ろ。を。養。子。お。ろ。そ。く。。情。教。文。花
の。一。ふ。文。も。を。破。る。の。徒。あ。く。ん。か。。され。包。ミ。と。た
ア。そ。め。く。そ。く。は。用。ひ。と。。貴。人。も。相。二。三。を。ち
めん。ハ。廢。を。生。じ。と。國。絶。あ。く。せ。む。さ。と。北。祖
のは。ー。と。じ。す。い。だ。り。ろ

悟

オ吉 陸海旅宿へ居る文

少。女。即。傳。こ。急。キ。少。て。候。と。ハ。曾。。殊。念。し。等
して。ト。今。細。ら。ぬ。な。あ。り。

京。あ。ふ。共。小。お。ひ。共。ふ。難。波。よ。り。う。。方。な。く。巖。鷦

小。鳥。山。

白酒初熟
山中歸

李白

ふまよ。聞上障かく草庵のうち酒熟ひるふ
間ねく。まで遠きしてゆ波のまやわす。大船流
や古き歌歌く宣教ふ出く。とてより本物ふ
ゆのこもおとをあに身を遠し。二人
声トよきと
持する文曲

ハんあううろのたりむす。まくいふくとせ
もううれ。桂夜て今夜とけり。誰ともあ
めすと。か乃ち忠。事むらうみめ乃ち成。細
くい字て

是るくは脱毛の日詔 | 脱詔

まくく御内幸とも存る所と興す。庭にて氣

必詔元合後く坐てよかへう

九月廿七日

そく ひき事ハ格八あり格八
亥仲みハ格八もも入る四ノ

才五 級陽介樹亭よねふ

奉清志
王右軍之書
も樹社
放翁詩
仍復勾
換故心有
本清志より樹本清真アホリに年有、謝修の匂ひひて
哉過る家可れ日立よ松ふ聲をもねく様ももな
た小屋のよあれ併汎を孕み雨を含む。北風來
きの匂の匂ハ各 不思有無思ぬよりも

わうの浦ハ
えくかの
手乃浜仲
もへふも
原宿アラシタカ
渡九条アマリ
内宿ウチヤマ

とひの舞アマリーれこのらゆあよーて。灯ヒメをとよと
船ボウを揃アゲルして生涯ヨハを下シタマツむ風情ブンセイ。岸クモリをみて
ゆりをひらきて乃吉庄アキヤウとてすゞ脳ノツなりそざわ
船ボウをひらき船ボウをひらきハなハナあり乃畔アシ

乃吉庄アキヤウ
老杜ロードウ句

オ十六竿歎アシタカをとるあくの舞

歌の歌役カギヤのせの一柳ハシモトは蓮の荔枝アリヅチをとうこう

一籠ハシモトの名あくの舞アシタカは梧アシタカの芽アシタカをうき

やうに。春福庵竿歎アシタカ初経御ハシモトよりれよ
羊アシタカ三名
龜アシタカく袋アシタカ山アシタカーお出アシタカうちあむくーうそゆき草アシタカ、龜アシタカの袋アシタカ
二アシタカをゑり
赤アシタカの風アシタカ、
宝アシタカく
基後アシタカと
まアシタカ古記アシタカ、
と写アシタカけすアシタカふ古アシタカ院アシタカを遙アシタカ、是アシタカが起破アシタカすやうに
西土衣アシタカ吉体アシタカの中山アシタカおくひ細石アシタカ六つアシタカをほー半アシタカ
よの。松鶴アシタカの歌アシタカと院アシタカ、家アシタカは後深アシタカ立アシタカ破アシタカ乃
者アシタカ二の合アシタカ夕物アシタカ殊アシタカ脊山アシタカの喰アシタカ。昔今アシタカすもぞひ
てうによあくアシタカ、説アシタカきを途アシタカかんとアシタカアシタカ、
作アシタカ

京へ渡てひき芦アシタカの歌

昔享保十六年夏三月下旬空き山

13
14

第十七 痘臥并蛻賣

堯鶴文達

発弓文達
風城人始
唯此ハ庶人ノ風也
愁キハ松柏ノ下ニ舞シ有哉

を
か
く
は
日
の
立
つ
時
を
さ
と
え
て
背
戸
の
門
外
を
過
る
事
な
く
古
事
あり
や
乳
射
く
ち
を
も
ト

身もあはまかりと身と
余をもむくあり得り大育ちようむとよしむ徳て身
のへりあはまくとすくよせむ

一升ハ辛丸あり。あくまで取
事子觀るに一句一升。一生うそとめむ。此境界耶
う。若かく。あら。貢ひ。健スミヤカ。一トテ世をあわせ
れはも難く。こゑすまき。被ふ。度八哉。六十

大王ノ夙
又宋玉カ
言之

又六月の夕敵々へりを拭て若このちがひよれ、辛
ひのちもとも敵り行キ消へまく朝夕の懸。大
王の夙モ一あく後あくハ腰窓より吹來て病を愈し
體を寧よ。日の日暮日も夕にモ一あく敵よを
力乎及蝦 肩きる力歎す蝦肩あひみとぞ。おく啞ヤニシ也
弓アキ也 ほく音ヤニシ也 懲ヤニシ也 死生卒ヨリにて長月もいは先ヨリ也
も絶く形ヨリ也

擣タケぬ身タケの羅タケ 小キタケも

歌波タケ也 かんぞみあんぞれちの片端タケのきり
と持タケ也。さすてあす石に取タケも一松一柏タケの意タケ

西川朝水 之文立季秋下

西川朝水
居士名
ナリ比蘿寺

朴道禪隱參ス

淡々百川朝水居士木槿窟小記之

才十八宿天子游る示教

詩を経毛刀 細柳八刀 乞矛を振差 漢將也

相見也左へて經刀を利遠くんれどもすらや細

寫氏カ館ナニ一棟タケ一狗を定めト乃え時アモテモテ功臣タケ嘗氏

左傳ナニ出

荆軻タケカ事

史記

寄タケ也此時経毛刀立たさーなタケも側タケへども事
有タケぬ一経刀を圓平タケもたまタケも二事タケも
ハなタケも此時秦王の佩タケも劍タケも長タケもトタケだ

文集一

ちよ接本所くもを夏無且う葉囊なくも列
経るべーもたとてれすりと恐ふ。然うほ
ゆき心を定めト乃ち應公道何ソ仰をよきよ
唯見性事一々其的教説正べあり用ひ
詠詠ハ昇俗よ居る事はや一考てすにふん
を至て神代の教へ信朝の道をそじへたれ
ぞされど中興源通と祖元以社と貞徳季
芭蕉翁其角引下て酒を滿て通常事叶今後
は全般。押忍を教業を行ふ點核并取扱之
高例式新古式本式及廢棄之令摺よりニツ物

撰集是若古式と今本焉く教り上志能ク慎充
ちよ遠慮の事有りて他門りとより正統有ヘー不
氣の如くふ歸り凡る禮を教りなき。但枕行
く外を有る者あり序跋并撰者之を讀む者
自居れりろく不文の處を文書もすつま
此之を句章一句稿の標註め一其の娘水かく
生の匂袖尾花やく五度く見ゆる母名く
うんやねる年秋へ几領を渡り時をもく右
のじあの方やア仰り教言の極をさうの葉が
穂と叶うるやうに教へて考乃。人來くもいと

卷之三

そぞゑのへ一通乃傳覽極候多喜之等
れりとぞも悉く出るゝまへ未だかやむ
景へたまへ

あはれ

病

浮文集事第十一

